

国際理解教育/開発教育 学習指導（活動）案

【実践者】

授業者氏名	大森 洋介	学校名	岡山県備前市立片上小学校
教科（科目）・領域	総合的な学習の時間	対象学年（人数）	6年 1組（26名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2018年 6月 ～ 2019年 2月（52時間）		

【実施概要】

1. 単元名（活動名）： 「本当の国際協力について考えよう」					
2. 実践する教科・領域： 総合的な学習の時間及び特別活動	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標（評価規準を意識して設定）： <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップやグループでの話し合い活動、自分たちができる活動に意欲的に参加しようとすることができる。 ・収集した情報を壁新聞や発表原稿にまとめたり、プレゼンテーションしたりする活動を通して、自分の考えや思いを適切に表現することができる。 ・自分たちには、どんな国際協力ができるのかを考えて主体的に判断し行動することができる。 ・厳しい生活を強いられている世界の子どもたちの現状を、知ることができる。 					
5. 単元の 評価規準	①知識及び技能	難民について、知りたいことを選び、その実態と原因を適切な方法で調べている。			
	②思考力、判断力、表現力等	難民を助けるために自分（たち）ができることを、根拠を示しながら説明している。			
	③学びに向かう力、人間性等	世界で起きている課題を知り、自分たちの生活と世界とのつながりを意識し、これからの生活のあり方を見直している。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	<p>【単元設定の理由】</p> <p>世界の子どもたちが抱えている問題は、貧困、紛争、教育、宗教対立、地雷、水、食料、医療など、多岐にわたり、これらは児童から遠い問題のように思える。実際、こちらから何らかのアプローチをしなければ児童の前を通り過ぎるだけの話題にすぎない。この単元では、自分たちに一見何の関係もないように思える難民問題を、児童と一緒に考え行動していくことを大切にしたい。「他人事」と考えていた問題を「自分事」として受け止め、考えることができるようになれば、様々な課題に、より主体的に取り組むことができると考える。</p> <p>【単元の意義】</p> <p>本単元では、今の地球社会に起きている実態とその原因を理解し、それらを自分事として、解決していこうという思いと実践力を育みたい。そして、児童が社会と関わる大切さを感じるとともに、自分のこれからの生き方や生活のあり方を見直すことができるようにしたい。</p>				

	<p>【児童／生徒観】</p> <p>本学級の児童は、真面目で決められた課題に対しては、最後まであきらめずに取り組むことができる。また、教師の話真剣に聞いて考えたり、友達の良いところを取り入れようとしたりすることができる。しかし、自ら進んで課題を見付け、主体的に取り組む経験に乏しく、受け身の姿勢で学習する様子がよく見られる。</p> <p>また、児童の社会問題に対する知識は乏しい。個々の問題の関係性を考えることが苦手で、理解が深まりにくい。また、社会問題に対して自分なりに考えることなく、イメージだけで捉え、一部の国や人のことを悪く、差別的にみてしまう面がある。</p> <p>そこで、難民問題について資料や動画、ゲストティーチャーの話などを通して理解を深めることで、多面的に問題を捉えることができるようにしたい。学んだことを基礎にして難民の実態と向き合い、主体的に考えて行動できる力を育てたい。また、学習していく中で、遠い国の「他人事」でなく、同じ地球に暮らす一人として「自分事」として捉える視点を養い、行動に移すことができるようになることを願っている。</p> <p>【指導観】</p> <p>この学習では、当事者意識をもって、真剣に考え、行動できる児童の育成を目指したいと考える。しかし、世界で起きていることは、児童の身近なことではないため、どこか遠くの話として当事者意識をもちにくいと思われる。そこで、単元導入では、貧困や教育などの他の国の子どもたちの問題を知ることから始めたい。それまで全くと言っていいほど知らなかった事柄を多く目にすると思われるため、識字率を手がかりにいくつかの国を取り上げた資料を作成し、読み取ったり、自分たちの生活と比較したりすることで、時間をかけて基礎的事項を育んでいく。また、実際に支援活動を行っている人や行ったことがある人の話を聞き、支援の実際や支援先の人たちの思いにふれ、それまでに調べた事実の上に積み重ねることで、自分の考えを構築する。さらに自分の考えを基にして、ユニクロ・GUが社会貢献活動として行っている「届けよう！服の力プロジェクト！」の活動に主体的に取り組み、その活動を校内全体や地域へと広げていきたいと考える。</p>
--	---

7. 単元計画（全52時間）

学習過程	主な学習活動	教師の支援	資料
【1】 課題設定	<ul style="list-style-type: none"> ・「世界一大きな授業」をもとにした授業を行う。世界の人口の中で、年齢構成や富の構成などを体験的に知る活動を行い、学校に行きたくても行けない子ども達がいることを知る。また、文字が読めないことは、時に生命に関わることを模擬体験する。①②③④ 	<ul style="list-style-type: none"> ○識字率の低い国を取り上げ、世界の子どもたちが抱えている現状を知ること、問題意識をもつことができるようにする。 ○問題に対して、自分たちができることは何かを考えさせることで、学習の見通しをもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 「世界一大きな授業」 「もし世界が100人の村だったら」 「マララさんについて」
情報収集	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが知っている世界の問題についてイメージマップに書き込み、話し合う。⑤ ・世界の国々の写真を見て、現状について知る。自作資料「世界の問題と子どもたち」を用いて、識字率の低い国の子どもたちやインドの貧困層の子ども達の抱える問題について知る。映像資料や自作資料を参考に相違点や共通点をベン図に書き込む。それをもとに、気付いたことを話し合う。⑥⑦⑧⑨ ・これまでの学習をもとに、再度イメージマップを使って、どんな問題があるかを視覚化する。自分で調べてみたいこと（課題）を個人で設定する。⑩⑪ 	<ul style="list-style-type: none"> ○今まで学習したことやニュースなどでの知識をもとに、世界にどんな問題があるか知っていることを出し合うことで、共通理解を図る。 ○ベン図を活用し、現地と日本の現状や生活の様子、考え方などを比べ、相違点や共通点を整理することができるようにする。 ○イメージマップやボーン図を活用して、調べたい理由を明確にさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「マララさんについて」の資料 イメージマップ ベン図 世界の国々の写真 自作資料「世界の問題と子どもたち」 イメージマップ ボーン図

整理 分析	<ul style="list-style-type: none"> 個人で設定した課題を交流し、それをもとにグループをつくり、図書やインターネット等で調べ、情報カードに書いていく。さらに、ボーン図やピラミッドチャートで思考を整理した後に話し合いを行い、模造紙1枚にまとめる。⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲ 	<ul style="list-style-type: none"> ○情報カードやボーン図、ピラミッドチャートを使って、自分たちの考えを可視化した後に、グループで話し合うことによって、意図をもって模造紙1枚にまとめることができるようにする。 	<p>情報カード ボーン図 ピラミッド チャート</p>
まとめ 表現	<ul style="list-style-type: none"> 各グループの考えを共有するために、中間発表会を行う。⑳㉑㉒㉓ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ポスターセッションの形式で行い、それぞれの問題についての情報を共有できるようにする。 ○世界の問題についてより詳しく知り、「何か自分にできることはないか。」という思いがもてるようにする 	
【2】 課題 設定	<ul style="list-style-type: none"> ユニクロ店長を招聘して、難民問題とユニクロとGUが行っている社会貢献活動「届けよう！服のカプロジェクト！」について知る。⑳㉔ ユニクロ店長の話をもとに自分たちが考えたことを共有し、これからしていきたい活動について話し合い、方向性を決め、これからの学習の流れを確認する。㉕㉖ 「届けよう！服のカプロジェクト！」に向けた取り組みを計画する。㉗㉘ 服を集めるために、ちらしを制作したり、校内放送の原稿を書いたり、ポスターをかいいたりして校内や地域の方々に呼びかけ、協力をお願いする。㉙㉚㉛ 	<ul style="list-style-type: none"> ○難民問題やユニクロとGUが行っている社会貢献活動についてあらかじめ調査活動を行っておくことで、情報を集めやすくする。 ○ピラミッドチャートを用いることで、事実や根拠に基づいて、自分の考えをまとめることができるようにする。 ○目的や協力の対象、方法を確認する。 ○目的や協力の対象をくり返し確認することで、服の集め方を工夫したり、進んで実践活動にかかわったりすることができるようにする。 	<p>ユニクロ・ GU 自作資 料・動画</p> <p>ピラミッド チャート</p> <p>ボーン図</p>
情報 収集	<ul style="list-style-type: none"> JICA 関西を訪れて専門家の話を聞き JICA が行っている国際協力や難民問題、世界の子どもたちの現状についての理解を深める。(社会見学) 難民、国内避難民、移民の違いをフォトランゲージの手法を用い、写真を仕分けすることで難民の定義を確定する。その後に「だれが難民か」のカードゲームをすることによって、難民の定義、関連機関、関連条約等を理解する。㉜㉝ 	<ul style="list-style-type: none"> ○JICA が行っている国際協力や難民問題、世界の子どもたちの現状について、質問したいことをあらかじめ考えさせておくことで、自分の課題に関する情報を集めやすくする。 ○難民、国内避難民、移民の違いをフォトランゲージの手法を用い、写真を仕分けすることで難民の定義を理解することができるようにする。 ○難民の一般的定義としては、「自国の迫害や危険を避けるため他国に逃れる者」であることを示す。 ○カードゲームを行い、カードに書かれた文章をもとにだれが難民かを個人、グループ、全体で考えることができるようにする。 ○世界地図で難民発生地域や難民の数、難民の受け入れ国などを示すことによって、難民は、先進国のみを目指しているわけではないということに気付くことができるようにする。 (参考：UNHCR の難民統計によれば難民の約86%が開発途上国で受け入れられている。) 	<p>難民、国内 避難民、移 民の写真</p> <p>カード</p> <p>世界地図 JICA10分 映像集 「国を逃れ る人々」 UNHCR の 資料</p>

<p>整理 分析</p>	<ul style="list-style-type: none"> 難民体験のシミュレーションを行う。 ⑳㉑ (本時㉑㉒) 難民キャンプのシミュレーションを行う。 ㉓㉔ 難民の受け入れや定住について考える。 ㉕㉖ 難民支援で私たちに何ができるかを考える。 ㉗㉘ 	<ul style="list-style-type: none"> ○難民となるプロセス（紛争発生から避難まで）を模擬的に体験することで、難民の境遇や苦難を理解できるようにする。 ○難民キャンプを模擬的に体験することで、難民が何年もの間不安を抱え、仕事や学校など日常的に生活していることを理解できるようにする。 ○難民キャンプに入れた場合と入れなかった場合のシミュレーションをしたり、家族ごとの事情を追加条件として提示したりして、自分の家族だったらどのような判断を下すかなど、難民問題の難しさや多様さを実感できるようにする。 ○難民の証言を読んで、難民の新たな定住先での暮らしについて考えることができるようにする。 ○難民の認定を受けた場合、内国人同等待遇を受けることができる。しかし、定住先の暮らしは、必ずしも満足いくものではない。証言を読んで、自分自身の日々の暮らしと比較することによって違いをみつけたり、難民が受け入れ先においても様々な問題を抱えており、多文化共生の課題が自分たちの社会にあることを認識したりする。 ○難民キャンプや難民たちの生活を撮影した写真を数点黒板に貼り、フォトランゲージを行う。無いものは「モノ」だけでなく、「平和や自由、仕事」などもなくなっていることに気付くことができるようにする ○難民支援のために、自分たちにできることを話し合うことによって、「届けよう！服のカプロジェクト！」の活動へとつなげる。 	<p>JICA10分映像集「国を逃れ人々」</p> <p>資料「貧しい国に難民」</p> <p>難民の証言</p> <p>難民キャンプや難民たちの生活を撮影した写真</p>
<p>まとめ 表現</p>	<ul style="list-style-type: none"> ユニクロ、GUを通して、集まった服を難民に送る。㉙ 「届けよう！服のカプロジェクト！」の意義や社会貢献活動について、自分の考えを明確にするために思考ツールを用いて検討し、交流する。㉚㉛ 「届けよう！服のカプロジェクト！」事務局から届けられた返事を受け取る。㉜ 活動のまとめとして、協力をしてくださった方々にこれまでの国際協力活動の情報を発信し、協力への感謝や学習したことを伝える。㉝㉞㉟ 今までの活動をふり返り、良さや改善点から自分の成長に気付く。㊱㊲ 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手意識をもち、集まった服を丁寧に箱詰めして送る。 ○PMI（分析表）を用いることで、事実や根拠に基づいて、「届けよう！服のカプロジェクト！」の意義や社会貢献活動について、自分の考えを明確にすることができるようにする。 ○返事を受け取ることで、自分たちの活動に自信がもてるようにする。 ○全校児童、保護者、外部の専門家、地域の方々など、たくさんの方々の協力で達成できたことに気づき、感謝の気持ちをもてるようにする。 ○今までポートフォリオしてきた資料をふり返ることで、今までの自分たちの学習を評価し、この活動を通しての自分（たち）の成長に気付くことができるようにする。 	<p>PMI（分析表）</p> <p>今までポートフォリオしてきた資料</p>

本時の展開 (第35・36時)			
本時のねらい：難民体験のシミュレーションを行い、難民となるプロセス（紛争発生から避難まで）を模擬的に体験することで、難民の境遇や苦難を理解できるようにする。			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
導入 (15分)	<p>1. JICA10分映像集「国を逃れ人々」の冒頭を視聴し、難民の定義をふり返ろう。 ○本時は、難民になったつもりで避難することを模擬体験することを伝える。</p>	<p>* 難民の一般的定義は、「自国の迫害や危険を避けるため他国に逃れる者」であることを示す。</p>	<p>・ JICA10分映像集「国を逃れ人々」</p>
展開 (30分)	<p>2. 模擬体験をしよう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>国内で戦争が起きました。対立勢力によって殺される危険があります。カバン2つに荷物をまとめよう。40個のリストから30個に絞ってカバンに詰めよう。</p> </div>	<p>* 4人で1グループになり、父・母・兄弟または姉妹になって考えることで、臨場感が出るようにする。 * 「家族」の役割によって、持ち出したいものが異なることを認める。</p>	<p>・ 持ち出し物品リスト</p>
	<p>(持ち出し物品リスト) 1.気に入った服、2.ジュース、3.缶詰、4.預金通帳、5.資格証、6.着替え・下着、7.保存食品、8.宝石、9.タオル・靴下、10.コレクション、11.卒業証書、12.防寒着、13.懐中電灯、14.携帯電話、15.ナイフ、16.筆記用具、17.トイレトペーパー、18.お弁当、19.車の免許証、20. テレビ、21.ペット、22.アルバム、23.水、24.現金、25.携帯ラジオ、26.薬、27.パスポート、28.化粧品、29.調理用具、30.パソコン、31.トラベラーズチェック、32.米、33.金(ゴールド)、34.愛読書、35.おかし、36.CD、37.毛布、39.ミュージックプレイヤー、40.自分で記入</p>		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>長時間歩いてやっと港(空港)についた。船(飛行機)には、多くの人が見たいと望んでいる。荷物制限があり、今度はカバンを1つにし、荷物を15個に絞らないといけない。どの物品を持っていくか話し合おう。</p> </div>	<p>* 自分にとって、家族にとって大切なものは何かを、グループで考えさせる。 * 「家族」それぞれの思いがぶつかってもよいことを知らせる。</p>	<p>・ ワークシート</p>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>ある国についた。入国検査がある。パスポートを見せると言われる。入国審査官は、言葉が通じないので厳しい。どうしたらよいか考えよう。</p> </div>	<p>* パスポートがない家族はどうするか、入国審査官と言葉が通じない場合はどうするかなど、具体的な場面を想定して考えさせる。 * 平和な社会では、「賄賂」に当たるようなことでも起こりうることを確認する。</p>	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>難民キャンプにたどり着いた。残った荷物は何か。キャンプでは、国連から毛布と食料とテントが届いている。残りの持ち物でどう暮らしていくか考えよう。</p> </div>	<p>* 難民キャンプで役に立つものと役に立たないものに分けて、これからの生活について考える。 * 難民キャンプでの生活は、2、3年、長ければ10年以上続くことに触れる。</p>	
まとめ (45分)	<p>3. 模擬体験をふり返ろう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>それぞれの場面で、どんな気持ちになったのか、ふり返ってみよう。</p> </div>	<p>* 模擬体験で感じた感情を引き出し、発表させる。 * 自分たちの模擬体験を思い出しながら、難民の境遇について考えさせ、付箋紙に記入し、自分の意見や感想を発表させる。 * ワールドカフェの方式で各班の意見を交流した後、クラス全員で共有する。</p>	

	<p>○難民の証言（資料）を配布し、自分たちの模擬体験を思い出しながら、難民の境遇について考える。</p>	<p>*難民の証言にある実際の〈逃げる〉体験と自分たちの模擬体験を思い出しながら、難民の境遇について考えさせ、ワークシートに記入し、自分の意見や感想を発表させる。</p>	<p>・資料「難民の証言」</p>
<p>まとめ：難民の人たちは、大切なものをたくさん失い、苦しい状況になる。</p>			
<p>9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）</p> <p>難民となるプロセスを模擬体験することを通して、難民の気持ちを想像しながら捉えることができるようにする。（ワークシート・話し合いの観察）</p>			
<p>10. 学習方法および外部との連携</p> <p>本学級は、今年度、ユニクロ・GU が行っている「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」に参加し、それを単元構想に組み入れて、総合的な学習の時間を進めている。</p> <p>「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」は、日本全国の小・中・高校で、児童・生徒が主体となって、着なくなった子ども服を回収する活動である。本プロジェクト開始時には、ユニクロ店長が来校し、服が持つチカラや難民についてスライドや動画を使って説明する出前授業を行った。その後、児童が主体となって、総合的な学習の時間や児童会活動などで着なくなった子ども服を回収し、回収された服は難民や避難民など、世界中で本当に服を必要としている子ども達にユニクロ・GU の担当者が、責任もって届けてくださることになっている。</p> <p>本プロジェクトは、2013年にユニクロ・GU の「全商品リサイクル活動」の一環として始動し、5年間で述べ 1,057 校、約 12 万人の児童・生徒が参加し、160 万着以上の子ども服を回収した。2018年度は約 390 校の小・中・高校が参加している。本学級も4月に応募し、5月に参加が認められた。このプロジェクトへの参加を通じて、世界の難民問題など地球的諸問題への理解を深めることができるとともに、身近にできる社会貢献活動を児童が主体的に行うことができるなど、ユニクロ・GU との連携することによって、学習を深めることができると思う。</p> <p>本校では、6年生の総合的な学習の時間で「本当の国際協力を考えよう」をテーマに学習を進めている。毎年6年生は、JICA 関西へ訪問し、館内の展示物を見学したり、JICA 職員や元青年海外協力隊員の話の聞いたり、開発途上国の食事を味わったりしている。</p> <p>普段は、図書やインターネットを使って調査活動をしているが、実際に JICA 関西を訪れると五感を使って学ぶことができるので、児童は目を輝かせながら調査活動を行っている。</p> <p>また、JICA 職員の方から JICA が行っている活動や国際協力の話の聞いたり、元青年海外協力隊員の現地での活動や子ども達の様子を聞いたりすることによって、今まで自分たちが調べてきた課題を解決したり、新たな疑問や課題を見つけて、次の調査活動への動機付けとなったりしている。</p>			

<p>11. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修で、総合的な学習の時間の単元構想図の見直しや授業づくりについての検討を行う。 ・国際理解教育、開発教育の授業づくりについての研修を行う。上記本時の授業公開を行い、本校や備前市内の先生方に授業参観していただく。 ・備前市教育研修所「総合的な学習部会」にて実践交流を行う。 ・岡山県小学校教育研究会「総合的な学習部会」副部長として、研究発表会や県内の様々な地域の研修会等で実践発表を行う。 ・岡山県小学校教育研究会「総合的な学習部会」に実践報告書を提出して、実践発表を行う。実践報告書は、次年度、冊子となり岡山県下の全小学校に配布される予定。
<p>12. 苦勞した点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の実践は、全52時間の単元計画なので児童の意識が続くように配慮した。 ・心に響く体験活動を単元計画に適切に位置付け、共同的な学びや体験活動をくり返し行えるようにした。 ・小学生に「難民」についてどこまで教えるか、何に焦点をあてるかについて、文献を読んだり、話し合ったりした。
<p>13. 改善点</p>	<p>今回の実践では、総合的な学習の時間だけでなく、教科や特別活動と関連させながら実践した。この実践を再度実施したり、他の学校で追試したりする場合は、単元計画の見直しが必要である。そして、児童の主体的な学びを促すには、児童がじっくりと対象にかかわり、気付きをもったり、課題を見付けたりしながら学習を進めること。価値ある体験を、単元計画に適切に位置付けることが大切である。</p>
<p>14. 成果が出た点</p>	<p>本学級は、今年度、ユニクロ・GUが行っている「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」に参加し、その活動を単元計画に組み入れて、全52時間の単元で総合的な学習の時間を進めた。このプロジェクトへの参加を通して、世界の難民問題など地球的諸問題への理解を深めることができるとともに、身近にできる社会貢献活動を児童が主体的に行うことができるなど、ユニクロ・GUとの連携することによって、より深い学びを行うことができた。また、52時間の単元を通して難民と向き合い、難民についてきちんと理解してからこの活動に取り組んだ結果、児童は、主体的に「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」に取り組むことができ、全校児童や地域の方々、こども園や中学校の人たちにも呼びかけ、4,739枚（段ボール48箱分）の子ども服を集めることができた。ただの特別な活動ではなく、総合的な学習の時間の単元計画にきちんと組み入れて行ったこと、JICA関西を訪問し、JICAの国際協力を知ったり、専門家の話を聞いたりすることによって、今まで自分たちが調べてきた課題を解決したり、新たな疑問や課題を見つけて、次の活動への動機付けとなったりした。</p> <p>この学習を通しての成果は、片上小学校、片上認定こども園、備前中学校、地域の方々、この学習や活動を通して繋がったこと。また、自分たちに一見何の関係もないように思える難民問題を、「他人事」ではなく「自分事」として受け止め、考えることができ、学習や活動に主体的に取り組むことができたことである。</p>

15. 学びの軌跡
(児童生徒の反
応、感想文、作文、
ノートなど)



『届けよう！服のチカラプロジェクト』をふり返って NO.1



名前:

この授業をはじめたころは、難民というものを知りませんでした。難民という言葉の意味を知った時は「大変そうだな。」としか思っていなく、「自分の家や服がないなんて…」と自分よりも下に見ていました。けれど国際協力の勉強をはじめ、難民の人は私達と同じくらしをしていたということが分かりました。難民シュミレーションで、にげる事の大変さや何かあるか分からない「きょうかい」というものを感じ何がつかぬのか、大変なのかがよく分かりました。このような難民を助けたらいいと思っていたけれど私達では何も出来ないと思っていました。けれど、服を集めて難民のひとに服を送る「届けよう！服のチカラプロジェクト」というものがありました。私達でも難民を助けることが出来ました。この服のチカラプロジェクトは、最初はうまくいきませんでした。けれど、何度もお話をしたり、自分達が集めはじめると学校全体が協力してくれるようになりました。中学校や子供園にも協力して

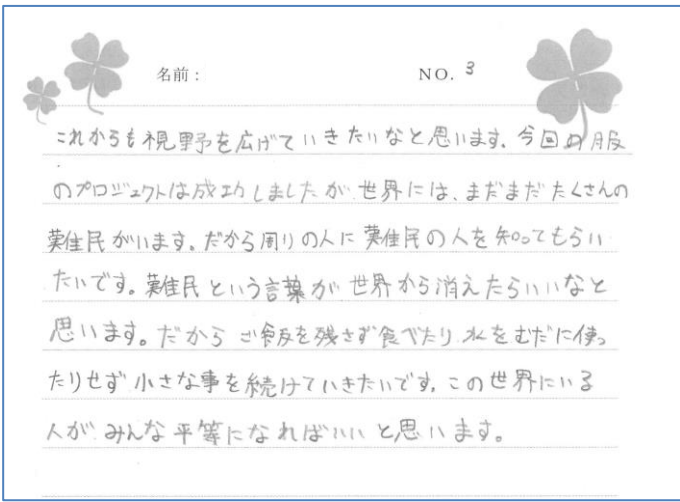


名前:

NO.2



もらい、計4739枚の服が集まりました。地域の方にも協力していただき、回覧板を回していただきたり、けいじ板に、はらせていただきたりしました。4739枚の服が集まったのも、こうして協力した。中学校や子供園、地域の方、そして、小学校みんなのおかげです。また、この「届けよう！服のチカラプロジェクト」で、協力することの大切さを知ることが出来ました。また、国際協力や服のチカラプロジェクトでたくさんの難民の映像をみました。そこで難民には、たくさんの子供がいるなと思いました。また、難民の人も、私達と同じように笑ったり、泣いたりするんだなと感じました。特に服をもらった時の笑顔が印象的でした。このような国際協力や難民の勉強することで、世界をみる事が出来ました。今までは、世界の良い所しかみえていませんでしたが、問題もみる事が出来るようになりました。勉強するのは大変だったけど、たくさんを知ることができて貴重な良い経験となりました。この経験をいかして

	<div data-bbox="539 165 1222 665" style="border: 1px solid black; padding: 10px;">  <p>名前: NO. 3</p> <p>これからも視野を広げていきたいと思います。今回の月曜 のプロジェクトは成功しましたが世界には、まだまだたくさん の難民がいます。だから周りの人に難民の人を知ってもらい たいです。難民という言葉が世界から消えたいなと 思います。だから食料を残さず食べたり水をむだりに使 ったりせず小さな事を続けていきたいです。この世界にいる 人がみんな平等になればいいと思います。</p> </div>
16. 授業者による自由記述	<p>難民問題についてJICAの資料や動画、専門家の話などを通して理解を深め、多面的に問題を捉えることができるようにした。学んだことを基礎にして難民の実態と向き合い、主体的に考えて行動できる力を育てることを意識しながら、実践を行った。児童は、遠い国の「他人事」ではなく、同じ地球に暮らす一人として「自分事」として捉えることができるようになった。また、児童は、主体的に学習や活動を行うことができ、自己の生き方についても考えることができた。</p>

参考資料：「[学校に行けない世界の子どもたち](#)」（JICA地球ひろば 2015年）

授業で使える10分映像集「[国を逃れる人々](#)」（JICA地球ひろば）

「[国際理解教育実践資料集](#)」（JICA地球ひろば 2014年）

「新しい開発教育のすすめ方Ⅱ 難民」（開発教育研究会編著 古今書院刊 2000年）